
犬夜叉 ショートノベルズ

雨鱒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬夜叉 ショートノベルズ

【Nコード】

N6280Z

【作者名】

雨鱒

【あらすじ】

『犬夜叉』短編集です。キャラクター一人一人を題にしたストーリーを載せていきます。

PART・1：忘れられない思い（前書き）

初めは犬夜叉を題にしたストーリーです。

PART・1：忘れられない思い

この日の昼間、犬夜叉は妙にボくっとしていた。

話しかけても「ああ」しか答えず、誰かが話しかけるまで自分から話そうとはしなかった。

また、この日はかごめが都合により現代へと戻っており、何時もならば怒って後を追うか、井戸の前で何やらブツくさ文句を言っているのであった。

が、犬夜叉はそんなマネもせず、空を見上げながら空を眺めていた。

「犬夜叉」

弥勒は犬夜叉の隣に腰を下ろす。

「どうしたのです。今日のお前は、お前らしくないですよ」

弥勒は優しく尋ねる。

「別に何でもねえ」

犬夜叉は素っ気なく答え、腰を上げると、

「ちよつくら、その辺をブラブラしてくる」

その場から去った。

犬夜叉の姿が見えなくなり数秒後、珊瑚と七宝が姿を見せる。

「ねえ、今日の犬夜叉。何か変じゃない？」

何時もとは違う犬夜叉に珊瑚と七宝は心配していた。

「犬夜叉は思い出しているのでしょうか…。桔梗様のことを…」

犬夜叉には現在、かごめという愛する人物がいるが、犬夜叉には桔梗という愛する人物もいた。

が、今桔梗はいないのだ…。

しんと静まり返った森の中に犬夜叉は一人、岩の上に腰を下ろしていた。

「桔梗…」

犬夜叉が桔梗と出会ったのは今から50年前に遡る。

半妖という身が故に人間や妖怪から蔑まれて来た犬夜叉は、今以上に荒れており、そんな桔梗と出会い、当初は桔梗が持つ四魂の玉を巡ってモメていたが、とあることから二人は親しくなりやがては愛し合うようになった。

犬夜叉は今もなお、桔梗と出会った頃のことを覚えている。今でも忘れない秋の夕暮れ時のファーストキス。

あの時、自分は既に四魂の玉を使い人間となり、桔梗と共に生涯を過ごすはずであった…。

しかし、運命は実に皮肉なものであり、桔梗が洞窟にかくまっていた野盗、鬼蜘蛛が奈落となり、約束の日、犬夜叉に扮して桔梗を襲撃し、自分達を破滅へと導いたのだ。

自分は封印され、桔梗は生涯に幕を閉じるはめになった。

俺は二度と目覚めないはずだった…。

しかし、運命は分らないものだ…。

50年後、ヒヨンなことからこの時代にタイムスリップした娘、日暮かごめと出会った。

出会った当初はいくどなく衝突をしたが、次第に互いのことが分かり合うようになった。

が、その最中見知らぬ鬼女が桔梗の墓から、遺骨を盗んで蘇生させ桔梗と再開することになった。

そして、再び奈落の手によって殺められことになった。

犬夜叉の中で桔梗は決して忘れられない存在であった。

仮に奈落の策略もなく、かごめと出会うこともなければ、自分は桔梗と共にしていた。

「桔梗…」

気付けば、犬夜叉の目からは温かく塩味のある水が流れていた。涙だ。

桔梗の死からかなり経つが、彼女の死は犬夜叉にとって未だに受け入れ難いものであった。

それは愛する者の死を含め、自分を半妖という身でありながら、差

別せず接してくれた、言わば初めて人の優しさに触れさせてくれた人物でもあった。

「桔梗…」

犬夜叉は仰向けになると、両手で顔を覆って泣いた…。

桔梗の妹である楓の村に犬夜叉は立っていた。

見れば未だ幼い楓の姿も見える。

「犬夜叉…」

誰かが自分と呼ぶ。犬夜叉は頭を後ろへ振り向ける。後ろには桔梗が立っていた。

「桔梗？」

「久し振りだな。犬夜叉」

桔梗はニコリと微笑む。

「犬夜叉。お前が私のことを未だに思っていてくれるのは、嬉しい。しかし、今のお前にはかごめがいる。そろそろ私のことは忘れた方がいい…」

意外な言葉だ。自分の生まれ変わりであるかごめを散々疎んでいた桔梗が、もう自分を忘れてかごめを本気で愛しろ、と言うのだ。

「桔梗、どうしてそんなことを…」

「今のお前にかごめはかけがえのない存在だ。だから、私のことはもう忘れる」

犬夜叉は、

「お前を忘れるだと、お前を忘れらるか！」

声を張り上げた。

「俺はお前を忘れることなんか出来ねえ。なあ、お前は俺にとって忘れてはならない存在なんだよ…」

今、かごめがいるのならば桔梗のことは忘れるべきなのかもしれないが、犬夜叉には桔梗を忘れることは出来ないことであった。

「犬夜叉…。お前という奴は…」

桔梗は目から涙を流し、犬夜叉を抱き締めた。

桔梗自信も犬夜叉を愛していたことは確か。しかし、奈落の罠により自分は死に、その後は生き返るが、既に犬夜叉はかごめと出会っていた。

かごめとの出会いにより自分が犬夜叉と昔の様に付き合う仲になれないことは分かっていたが、それを受け入れ難かった…。

今になってそれを悟ったのだ。

「犬夜叉…」

桔梗は犬夜叉から体を離し、

「私はこれからもお前達を見守っていく。だから、お前もこれからかごめとやっていくんだ」

姿が徐々に消え始めた。

「桔梗、待て、行くなあー！ 桔梗ー！」

気付けば眠っていたのだろう。空は既に茜色に変わっていた。

自分は夢を見ていたのか。それとも…。

「桔梗…。ありがとう…」

半妖という身から耐え難い差別を受け、愛する桔梗と二度の別れという悲しい出来事にも遭遇したが、悪いことばかりではなかった。

50年の時を経て、かごめと出会い、また、七宝や弥勒や珊瑚という素晴らしい仲間とも出会えた。

彼らは自分の身を決して馬鹿にはせず、受け入れてくれる。

桔梗のことを忘れることは決して出来なくとも、今の環境には感謝しなくてはならない。

そして、常に前を向いて歩き続けるのだ。素晴らしい仲間達と共に…。

犬夜叉は腰を上げると、仲間の元へ戻ったのであった。

PART・1：忘れられない思い（後書き）

どうでした。犬夜叉ショートノベルズ。え？ つまらない。
じゃあ、読むなー！（嘘）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6280z/>

犬夜叉 ショートノベルズ

2011年12月20日23時45分発行